21世紀の大学医学部に望むもの

文部省大臣官房政策課長
寺脇　研



ご紹介いただきました寺脇でございます．いま過分なご紹介をいただきましたけども，私の父親は確かに医者でございましたけれども，私は全くの素人でございます．医学教育課長をしているときに，なにがしか医学について何か言えたとするならば，ここにいらっしゃる高久先生をはじめとする先生方のお話を聞いて，役人というのは人の話を聞いて，それをいかにうまく理解して動かしていくかというのが重要な才能でございます．いわば聞きかじりの上手なやつというのが，役人としてはいいわけでございます．あまり一つのことに没頭してしまうと，まずいわけであります．

きょうはお引き受けしてまいったのでございますけれども，これは文字どおり後先を考えず引き受けてしまって，後悔をしてるというやつなんですが，高久先生のあとでお話をするなんていうとんでもないことになっちゃってて，弱ったなと思っているのでございます．

医学教育の今後の姿については，先生のほうからお話があったのでございましょうから，今日はるる，いろいろな検討がなされたでしょう．

新潟大学の医学部の教育をどうしていくのかというのは，最終的には新潟大学の先生方が決めることでございます．私のほうからはそういった意味で周辺部分というか，外の世の中の変化というか，制度の変化みたいなことを申し上げることによって，最後にきょう一日の新潟大学医学部の今後のあり方を考える参考になるのではないかと思うわけでございます．

医学部だけでなしに，私は新潟大学に常々敬意を払っておりますのは，非常に積極的に新しいことにお取り組になる姿勢がある．特に今後独立行政法人化は，私も実は医学教育課長の職を離れて3年になります．その後は生涯学習行政とか政策課とかやっておりますので，直接に高等教育の行政をしておりませんものですから，いろいろ伝わってくるところを聞いてると，非常に独立行政法人化を控えて新たな国立大学の在り方ということにも積極的に大きなプランが書かれていて，私などにはいろんな声が入ってきますが，周りの国立大学は脅威に感じている，というような話も伝わってくるわけでございます．

なるほどさもありなんと思うのは，私いまご紹介いただきましたように職業教育課長というのをやらせていただきました．そのときに総合学科というのも，実は私は，早く総合学科を出た医学部の学生がたくさん出るようになるといいなと思っておりますのは，つまり総合学科というのは，それこそさっき生物の履修の話もちょっと出ておりましたけれども，従来の普通科高校というのは，大学の医学部に合格するためのカリキュラムを組みたくなりまして，そのカリキュラムを生徒に強制してやっていくものですから，将来医者を志していたって，お前生物とらないほうが合格するのに有利だから，生物の授業じゃなくて，こっちを受けなさいということになったり，ましてや医者になるわけだから，このごろは高校でも看護とか，介護とかいうような授業も開設されてる学校もあるわけですが，そういう授業を受けたいと思っても，それは受けられない．総合学科の高校というのは，非常に幅広い科目を開設して，当然医学部を受けるために必要な数学とか，英語とかをみっちりやるのは当然のこととして，生物もやろうじゃないかとか，あるいはもっと

広く介護や，看護や，福祉についても高校レベルの知識というのを得ておこうじゃないか，というようなこともできるようにつくったつもりでございまして，なかなかしかし高校の先生方の考え方が変わらないものですから，大学進学するためには普通科のほうがいいんだよみたいに，中学校の先生もそういう進路指導をする傾向がまだあるので，もうちょっとそれが真価を発揮するのに時間がかかろうと思います．

一方で医学部だけではなしに，医者も大事ですけれども，やっぱり農業をする人とか，モノ作りをする人というのも大事だというので，職業教育課のときに，普通科高校からじゃないと大学に行けないというのは，なんとかならないものかというようなことをお願いしましたところ，多分全国で一番早く新潟大学の工学部が，じゃあ工業高校の生徒というのをちょっと採ってみようじゃないかと，工業高校特別推薦枠というのを初めてつくっていただいて，工業高校からでも国立大学の工学部にウェルカムだよというふうなことをやっていただいて，これはもう卒業生も出て，成果が出ておりますが，大学院進学率が極めて高い．普通科高校から来てる連中と比べていくと，成績もいいし，その後の大学院へ進んでなんかやろうというような意欲も高いなんて，まあ数が限られているせいもありますが，そういうことをやっていただいていたりします．

あるいはこれも一昨年，私お伺いさせていただいて，経済学部で経済学部の学生を対象に各界のさまざまな人たちの人生を聞く，生き方を聞くという趣旨の授業がございまして，例えば会社の社長さんとか，芸術家とか，いろんな方が来るなかに，文部省の役人というのも１人カリキュラムの中に入っていることになっておりまして，私がその年は講義をさせていただいたわけであります．これは日本中で言いふらさせていただいているんですけれども，私は今まで大学の学生に正規の講義というのを何回かしたことがございます．東京大学教育学部や東京工業大学の計画行政の大学院，あと新潟大学の経済学部で講義を行った．どこの学生が一番ちゃんと授業を聞いていたかというと，新潟大学経済学部の学生だった．東大教育学部の学生はぐったりしてみんな倒れて聞いておりまして，そんなら聞きにこなけりゃいいのになと思うんだけれども，来ないとまずいとかいう強迫観念で来てたのかもしれないです．一体この子たちは，教育学部で教育行政の授業に私が出たわけですけど，教育行政の授業に教育行政の先生がずっとやっていくんだけども，このコマは現役の教育行政をやってる人を連れてきて，なんでもこの人に質問してもいいという時間なのに，全然聞くこともない，することもない．おいおい，これではえらいことになったなと思ってたんでございますが，新潟大学の，しかも300人の教室だというので，これはよく噂に聞く私語だとか携帯電話とかいうやつがあるのかしらと，大教室で300人ということになるとと思ってましたが，見事な受講態度でございました．

なぜかなと考えてみたら，やっぱりモチベーションが高いということだと思うのですね．500人ぐらいの応募の中から300人，500人はとても入れないので500人の中から選ばれた300人だというようなことがあるのと，実はこれは文部省のほうが反省しなければいけないのですが，そういう世の中の第一線で働いている人の話なんていうのを，高校までの間に聞いたことがおそらくなかったんだろうと思うのですね．初めてそういう人の話を聞くので，これは面白そうだというようなことで目新しさがあって聞いたんだろうというのですが，そのときに真ん前に，一人，一生懸命聞いてる学生がおりまして，大勢の中に食い入るように聞いて，私はそのときに，あなた達はついこの間まで高校生だったわけだから，高校と大学をどう変えるために文部省がいまどうやって働いているのかというような話をしてたんですけど，一生懸命聞いている．私は，総合学科の卒業生の人もそろそろこういうところへ入ってくると思うけど，いますかねと言ったら，たまたまそのときは総合学科の学生はいなかったんですけど，一人学生が真ん前で座って一生懸命聞いてる学生が，「はい」と手を挙げて「君そうかい」「いや，僕は総合学科じゃありませんけど，工業高校の卒業なんですけれども」「ああ，君か．工業高校から工学部に入った学生，これは経済学部の授業じゃないの」と言ったら，「いや，この授業は是非聞いてみたいと思ったんで，聴講を申し込んで，許されて聞いているところであります」みたいなことを言ってました．

学生もいいなと思いましたが，やっぱりそういったカリキュラムを用意していく先生方．実は昨年の12月に中央教育審議会答申で，初等中等教育と高等教育の接続についてというのを打ち出しておるわけでございます．そこで初めて打ち出した概念として，お互いが選ぶ，相互選択する大学であってほしいと．大学の側が学生を選ぶということばっかりになってたんじゃないのか．その結果，学生のほうはこの大学に選ばれたい，選ばれたいと思って，選ばれるためにはショートカットしたらどういうふうに入っていけるか，じゃあ生物は取らないほうがいいやみたいなことでなっていってしまってる問題だっ

たけれども，選ぶ，学生のほうも大学を選ぶ，お互いが相互選択するという考え方にいよいよ入っていくべきではないのか．

子供の数が減ってまいったわけでございます．従来は確かに大学を希望する人と，大学に入りたい人と，大学の定員というのがアンバランスでございましたから，どうやったってそれはそうなると弱いほうが出てきます．ところが今年は河合塾の調査とやらによれば，160ぐらい，名前さえ書いていれば入れる大学があるというふうな結果が出てきておるような状態になってきておる．現実にもうそうですね．私たちも分析しているのは，大学の名前と学部さえ問わなければ，大学には必ず入れる時代に，実は2，3年前から突入してた．見せかけの数字と違いますから，現実にまだまだ計算上は10年後みたいなことを文部省も一時言ったことがあるんですけれども，現実は，実際は先行してまして，それは文部省が10年経ったらと言ってたのは，いま専門学校に行ってる学生が大学に入りやすくなったら，こっちへ流れてきた場合という計算をしてたんですけれども，ちっとも流れてこない．専門学校進学率はむしろ上がってる，微増をまだしている状態でありまして，名前さえ書けば入れるような大学に入るぐらいだったら，専門学校に行ったほうがいいと思う学生が増えてきている．つまり学生の側がもうそこでは選択が始まってるのですね．うちは大学だから入れてあげるよという大学があったときに，いや，別にそんなとこに入ったって何もなりゃしないから，専門学校のほうを自分は選ぶよというふうに，そのレベルのところではなってきているというような状態がございます．

つまり，それは背景には，そのためにいろんな問題も出てきてますけれども，学生がそうなってきたのは，社会が豊かになってきたということ．それから少子化が進んできたということ．そういうファクターがあって，だからいまの子供達は駄目なんだといっても，昔のようにもう1回貧しくわざとするわけにもいかないし，子供の数をメチャメチャ増やすか，大学の数を激減させるかみたいな政策というのも，現実的ではないわけでございましょう．大学生の学力がどうのこうのと言われますが，医学部は別として，一般的にはこれでも大学生かというふうなことを言われる．それは大学進学率が49%まできてるわけでありまして，新制大学発足時の昭和28年は8%だったわけでありますから，もう6倍以上になってるわけです．ちなみにそういっちゃなんですけど，大学の先生の数も当時の15倍になってるというふうに，ちょっとこれは正確な数字じゃありませんけれど．うちの大学の学生はどうしようもないということをその先生が言われるなら，それならあなただって昔は大学の先生になれてなかったんじゃないですかっていうふうに，それは言わざるを得ないわけです．つまり，それは何も揚げ足取りを言ってるんじゃなくて，大学が，そういうふうに社会が豊かになり，子供の数が少なくなったときの大学の姿を考えていかないと，戦前はこうだったね，昔はこうだったねと言ってもしょうがないというのが一般論としてはございます．もちろん医学がそれであっていいという問題ではないわけでありますけれども，そういう問題として多様化ということが出てこざるをえない．

それからもう一つの大きなファクターとして，生涯学習というか，長寿化ですね．みんなが長生きするようになったということがございます．私は大学が考えを変えなきゃいけないということのもう一つのファクターとしては，みんなが長生きするようになって，かつまた豊かですから，みんなが学べるようになったんです．昔だったら，高校を卒業したときに8%の人間が大学に行きますよね．残りは行かない．その人達はおそらく一生高等教育を受けないだろうという前提でものを考えればよかったけれども，いま高校の先生たちに私たちがお願いしているのは，そのとき大学に行かなくても，お前いつでも行こうと思えば行けるんだよということをよく伝えといて，将来社会人入学をするとか，聴講生になるとか，放送大学に入るなんていうことを考えれば，すべての高校卒業生が大学に行く可能性を持っている．高校にはほぼ100%行くわけですから，すべての国民が高等教育を受ける可能性を持っているという意味において，これは50年前とは大変な違いがきているということでございましょう．

私の父は昭和20年の九州大学の医学部の卒業生でございますけれども，もっと先輩で，いま全国最年長の市長をなさっている福岡県の田川市の滝井義高市長さん，85歳，私の父親よりも5年先輩の昭和15年の九州帝国大学医学部の卒業生で，そういうことで私も個人的にかわいがっていただいているのでございます．この間もお目にかかったら，この滝井義高が昭和15年3月九州帝国大学を卒業するとき，よわい齢25歳，自分の残された人生あと25年と思って，この25年を医学の医療に心血を注ぐという決意を持って九州大学医学部の校門を出た．ところがあにはからんや卒業したあと60年も，あと25年と思っていたのを60年も生きている．60年も生きていると，医学医療にも一生懸命いそしんだけども，みんなに請われ

て国会議員にもなられ，あるいは市長にもなられてこうやっていく，本当に人間の生涯が長くなったというのを自分が自ら実感しているというようなことを言われましたけれども，そういう観点に立ってやっていく必要性がある．

その観点を具体的にどこに結びつけていくのかというと，いろんな考え方はあると思います．これは別にそうするべきだと申し上げているのではなくて，そういう外的条件があるよということであります．

例えばそんなに早く世の中に出なければならないんだろうかということも出てまいりましょう．成人式が20歳でいま成り立たないのは当たり前だという方がいらっしゃる．昔の20歳といのうは，人生の40％きてたんだけれども，いまの20歳というのは80年の人生の25％しか来てないんだから，幼くて当たり前だと，成人式を30歳にすれば，あんなふうな成人式の混乱というのも起こらないであろうと．それはある意味で一つあるのではないか．

実はいまの中学生や17歳の心の問題といわれるときに，私たちもちょっと考えなければいけないのは，さっきゆとりの教育がおそらく心配だというお話が出たんじゃなかろうかと思います．いや，心配はしなきゃいけないのです．ただ私たちがいま初等中等教育を改革しようとしているのは，ゆとりを持たせなければ大変なことになっちゃうという前提で考えている．いまの大学生に問題があるということは私たちも十分認識をしてるんだけども，いまの大学生はまだゆとりの教育など全然受けておりませんので，そこのところはご理解いただかなければ，小学校からゆとりの教育を受けた世代というのは，まだ中学３年生にいまさしかかったところでございます．

確かにいまの大学生も高校で新しい指導要領を少し触れてますけれども，あれは大きな誤解がございまして，文部省は高等学校に，これからご説明します，高等学校もゆとりの考え方を持ってほしいと言っているんですけれども，現実にそれに沿った教育をしている高等学校というのはごくわずかでございまして，ましてや大学に進学している高校では，ほとんどそういうとこはやっていない．従来どおりの受験対応の教育をやっている．

私たちに言わせれば，文部省がお願いしているとおりの教育をしてくだされば，大学の先生方に満足していただけるような学生を送り込むことができると思っているのでありますが，高校の先生にも言い分がありまして，いま申し上げるようなゆとり教育を，高校からいきなりやれと言われたって困るよ，というのはごもっともの話なんで，小学校から順にやっていかなければ，これは本当に役に立たない．今年の４月に小学校に入った世代は，自信を持って大学に送り込めると思っておりますが，あと12年お待ちいただかなければならないのでございます．

こういうことなんでございます．よくゆとりゆとりと言いますけれども，ゆとりに３種類ある．小学校でゆとりを持たせていただきたい理由，皆さんご納得いただきたい，国民の皆さんにお願い．小学校では何のためにゆとりをつくるかというと，反芻できる余裕をつくってもらいたいからゆとりをつくっていくんだと．つまり小学校の段階で，知識を次から次へ伝授されるのではなくて，一つの知識を伝授されたら，その知識が何か生活の中で役立つという体験をしてから次へ進めるように，ゆとりをつくっていただけないものだろうかというわけでございます．

具体的に言えば，例えばこの間も小学校の先生と話していましたら，小学校の算数で速さというのをやりますよね，時速何メートルで走っていれば何分で着くがどうこう．Ａ君がこっちを出ました，太郎君がここを出ていって着いたときに20分経っていました．彼は時速何キロ歩いたでしょうと計算しますね．さんざん計算して，ある素晴らしい先生がいて，ちゃんとすべての子にわかるようにそれを教えた．教えたあと，従来だったら次の単元へ進むんですが，いまは，その学校は小学校におけるゆとりを持つ教育の先駆けをやってる学校だったので，じゃあ今までだったら次へいくんだけど，ちょっと今回……といって，小学校におけるゆとりというのは，教科で学んだことを反芻するためにありますから，子供たちを連れて学校の前の国道に出て行ったらしいです．国道に出て行っていろいろ見てみようと，これは社会科の反芻と，算数の反芻をしてもらいたいなという思いがあって先生は連れていったらしいです．社会科のときに教科書の中で，日本にはいろいろな何県，何県とか学んでいくわけだけど，国道の前を走っている車のナンバーをみんなで見てみようよ，いろんなところの車が走っている，この車はあれで見たあそこから来ているのかという実感，やっぱり遠くから来てる車はそれなりに汚れてたり，冬だと雪で汚れていると，北国から来てる車は雪の中を走ってきたからこうなってるのかなというのを見ながらやっていく一方で，先生はこう言ったらしいですね，「ここを走ってる車の速度って何キロぐらいかな」．誰一人生徒は，そんなのわかるわけないじゃんて，全員そう言ったらしいです．そんなの測れるわけないじゃん．さっきのコンピューターの話じゃないですけどそういう子が一人二人いて，スピードガンで測ればわかるんじゃないかと

いふうなことを言ったらしいけれども，そのときに先生が，「ちょっと待って，この間まで算数の時間に何やってたっけ」というふうなことで少し誘導していくと，子供たちは「そうか，ああやればわかるんだ」．たちどころに子供たちは巻き尺で100 m測って，ストップウォッチで測って，あっ，いま通過した，これで初めて速さという概念，算数の教科書で習った，ああ，こういうふうに使うんだということを学ぶことができた．こういう反芻の時間をつくっていきたいのです．

だから円周率を3年で教えるのかとか，少数の2桁の計算はさせないのか，少数第2位以下の計算はさせないのかと言われますが，それは教科書のうえではさせませんよ．まず仕組みをきちんと覚えてもらう．ところがこうやって測ったら，車はそんなに都合のいい速度で走ってくれないですから，ものすごい煩雑な計算になるわけですけれども，教科書で，太郎君はなんとかというときに，難しい計算だと嫌になっちゃうでしょうけど，現実に走ってるものを測ろうと思ったら，難しい計算でも子供たちはこなしていく．この時間をつくっていくのが小学校におけるゆとりであります．

ちなみにこのごろ少年犯罪が多いので，道徳教育をちゃんとやっとるのかと言われるわけでありますが，やってるんです．戦前の修身の教育に劣らずやってるつもりでございます．一時，確かに戦後，日教組対文部省という図式の中で，道徳教育を意図的にやらない時代があったことは事実でございます．私たちの世代なんかそうなのかもしれません．いまやそういうことじゃなくて，文部省がきっちり道徳教育をさせている．

じゃあどうしてこうなるのかといえば，道徳またしかりであって，修身の教育を受けてたころは，教科書でお年寄りを大切にしようと書いてあったら，家へ帰ったらお年寄りがいて，ああこの人を大切にしたら気持ちよかったなという体験ができる．額に汗して働くことは素晴らしいことだと書いてあって，家に帰れば，手伝いもしなければいけないし，子供はそれなりに仕事をしなければいけないから体験できるわけでありますが，いまの子供たちは，お年寄りを大切にしようったって，家にお年寄りはいないし，お年寄りと付き合う暇があったら塾に行けとかなんとか言われて行っちゃうから，反芻できないわけです．徳目を教科書のうえで学んでいるだけです．だからいまの子供にだって道徳のテストをして，人を殺していいか，悪いかと言ったら，全員が悪いと書けば先生が丸を付けてくれるし，褒めてくれると思ってるけど，現実に人を殺しちゃいけないということが身にしみて伝わっていない．だから実は小学校でのゆとりの時間は，なにも算数の反芻だけじゃなしに，そういうお年寄りと接する時間でもあってみたり，あるいは勤労体験をしてみる時間でもあってみたりというわけであります．

実はいまの中学3年生から以下の子供というのは全員小学校で作物を作った体験をしております．例えばさっき確かに生物を学ばないということの問題もありますが，作物を作った経験を，今までの子供は全然してなかったわけです．ゆとりと言ってますが，ゆとりというのは決して遊ばせるためにやってるわけじゃなくて，今までの教科中心から，少し時間をつくって，そこで何をするかということの例えば一例として，勤労体験をしたり，あるいは作物を自分で種を蒔き，栽培し，収穫して，それを食べるというところまでをやっていく．

ご承知かと思いますけれども，ここの地元新潟の上越教育大学附属小学校などに至っては，小学校1，2年生のときに牛を飼って，その牛が屠殺場，食肉工場に引き渡すところまで，子供たちは体験していって牛とずっとやっていくわけですね，そういった時間に．最後に牛を売るのか，このまま飼い続けるのかという討論を子供たちにさせると，なんの授業もしないで紙のうえでやれば，かわいそうだからそういう工場に売っちゃいけない，そこへ行ったら殺されるんだからというんですけども，むしろ牛と1年間過ごした子供たちは，それは牛はそういう運命なんだ，だから牛はこうやって死んで，肉になって，それを私たちは食べてこうやって生きていくんだということを，もちろんかわいそうだと言う子供もいるにしろ，そういう討論をして，その結論を出してやっていくとか，そういう体験をさせるためのものでございます．

中学校でゆとりを頂戴したいというのは，中学校の時期というのは，釈迦に説法でございますが皆さんよくご案内のとおり，思春期で，心も体も非常に動く時期でございます．だから中学生たちに対しては，もちろん反芻させる部分も必要ですけれども，主に中学生に対して必要なのは，少し気持ちにゆとりが持てるようにできないだろうか．時間に追われることをしないようにしようじゃないか．

従来，中学校3年間でこれだけやらなきゃいけないと言われていたことをやれば，せわしない中学校3年間でございます．それは中学校3年間で高校受験を目指して塾に行ってやらなきゃいけないと思っているのは，理由は一つは人生が短かかったからだし，一つは競争が激しかった．同年代の人がいっぱいいて高校に行きそびれる人もいるという条件のもとで，一生懸命，私たちの世代

なんかは高校入試のためにやるのは当たり前だというふうにやらされてきたわけです．いまの子供たちにしてみれば，長い人生80年も生きていくのに，なんでそんなに急がなければいけないのかなという思い，それから高校には全員入れるようになってるのに，なぜその中のこの高校じゃなければいけないといってやらされるのかと．努力するなと言ってるわけではないですけれども，過度の努力というかプレッシャーを強いられてる部分があるのではないか．やはりこの時期はもう少し心にゆとりを持たせるようにしていいのじゃないかという考えでございます．

そして高等学校では，実は高等学校でのゆとりというのは，選択するゆとりをつくってもらいたいと言っているのであって，学校の授業時間数にゆとりをつくるなんていうのは考えてない．現実に小・中学校というのは授業時間数が確かに減ってます，ゆとりをつくるために減ってます．高等学校の授業時間数というのは，減らした覚えは全然ないわけでありまして，高等学校というのはいくらでも授業を取っていい学校にしていこうという考え方で，新潟にはまだそういう学校はないかもしれませんが，昼夜開講単位制高校というのがほうぼうで出来始めていますけども，この学校などは朝の８時半から夜の９時まで授業を開設しています．極端にいえば朝の８時半から９時まで授業を取り続けることだって可能だけれども，自分の取りたい科目をとっていくなかで授業を取っていこうじゃないかと．

小学校や中学校は全員がこれだけの時間勉強するというのは決まってますけれども，高等学校というのは最低必要単位を決めてるのにすぎないのであって，それよりたくさん取っていける．だから医学部受験生が生物を取れないのは，画一的なカリキュラムを組んでるから，生物の時間が受講できないわけです．そういうふうに広い選択的カリキュラムを用意していれば，仮にセンター試験で物理を受けるにしたって，生物の時間だってあるわけだから生物の時間を取ろうじゃないかということができるようになる．従来の高校のカリキュラムだからこそそれができないというところがございます．

じゃあそのゆとりをつくって３割減とかいってるけど，どうなるのかと言いますが，これは全員が画一的に学ぶことを中学３年生までに今までやってたわけですね．ところが全員が行くのはもう高校までになったわけですから，文部省としては，これも昨年12月の中教審答申で初めてはっきり打ち出したのでございますが，今まで９年の国民教育という認識を持ってきたけど，国民教育は12年であるというふうに考えさせていただきたい．今まで国民教育９年だと思って９年で送り出すわけだから，その間に全部身につけさせなければいけないと思ってたことは，10年半ぐらいかけて教えさせていただきたい．

高校２年生の前半ぐらいまでのところで従来国民教育として画一的に詰め込んできた．それは詰め込まなければいけません．国民教育として必要な部分は画一的に詰め込まなければならないわけでありますが，それを高校２年の前期までにやるようにしましょうと．だから画一的に詰め込まなければならなかったことというのは，今回もほとんど変わってないわけでありますけど，それをゆっくりやる．

文部省は決定的なプレゼンテーションの過ちを犯してしまったので，皆さんをご心配させている．３割削減と言ったから，心配になっちゃった．皆さん心配になるのは当たり前．３割減速というふうに言えばよかったのです．スピードダウン，３割方余計に時間をかけて同じものを教えさせてもらいたい．

今まで，ただ詰め込んだら，詰め込んだはじからこぼれていく．学力低下という言葉が流行語になってますが，新しい考え方で学力剥落という考え方を打ち出せるかと．学力がはげ落ちる．いくら詰め込んでいっても，はげ落ちてしまう学力ではしょうがないのではないかというふうなことが言われます．

新潟大学ではそんなことはないでしょうけど，東京大学の学生に，２分の１プラス３分の２という計算問題をさせたら，３分の１の学生ができなかったというようなことを，テレビ局で調査して言ってる．それは多分，大学に入って勉強してる学生が３分の２いて，東京大学の学生の３分の１が，大学に入ったら全然勉強してないということの現れではないかというふうに分析なさる方がいる．つまり大学に入っても，医学部のように勉強しなきゃいけないとこでは勉強するから，従来習ったことはそこで必要であろうがなかろうが，そのまま頭の中に残っていくんだけども，大学に入った瞬間，もうやれやれ，これでもう東大法学部入ったからには大体みんな卒業できるらしいし，これでやれやれと思って遊ぼうと思っていると，従来覚えてたものも全部忘れていってしまう．つまり東大というのは３分の１の学生が，入っても勉強してないということの証明ではないかというようなことをいう学者の方もいらっしゃる．なるほど，いま東京大学に入ってる学生が，小学校６年生のときにその計算ができなかったとは到底考えられないわけでありますけれども，本当にできなくなっているとするならば，どのよ

うな知識も磨かざればどんどん錆びていったり，はげ落ちていったりしてしまうということなのかなとも思えます．

そういう意味で，小学校時代が少し時間をかけてでもはげ落ちない学力，剥落しない学力というのを，やっぱりそれを使ってみて初めて意味があるわけでありましょう．角度なんかなんで測らなければいけないか，それは測量するために必要なんだよ，それがわかれば，こういう形で煙突の高さだって測れるんだよ，なるほどね，というふうになっていけるようにしていくのが真の学力だ，そのために少し時間をいただきたい．

遅いよとおっしゃるかもしれない．遅いよとおっしゃるけれども，人生は長くなってるんだからそれでいいではないか．

それと，高校2年の半ばまでに中学校までの中身をやるといったら，高校の中身は半分になるのかというと，そうではないのです．実は高校でやってた中身を小学校でやる場合もあれば中学校でやる場合もあるんです．ただし，こちらのほうは自分の得意分野についてそれをやってもらいたい．だから端的にいうならば，小学校の5年生でも高等学校の数学1で出てくるような問題まで到達する子供がいたっていいし，それはそれでやっていけるようにしていこうじゃないかという，つまり小・中・高等学校のカリキュラムの画一性をなくしていこうというのが目指しているところなのでございます．

だからこれがうまくいけば，いまの子供たちが9年後に行く高等学校というのは，そのころまでには全部，高校を単位制にして，猛烈に勉強して1年で出る子もヒョッとするといるかもしれない．2年で出る子もいるかもしれない．あるいは6年，7年かけてゆっくりやっていく子もいるかもしれない．あるいは1年いて，やめて，なにか仕事をして，また戻ってきて取っていく子もいるかもしれないという高等学校にしていこうじゃないか．

そうなれば当然，大学は何を求めるかといえば，多様な勉強をしてくる高校生の中のどういうのを求めるかというのを，大学の側が考えていく．ご案内のように小・中・高等学校の教育は，文部省が決めるものでございます．こういう制度でこういうふうにやる，というのを決める．大学については，そうではない．文部省としても，こうあってほしいとかそういうことは言いますけれども，結局大学の教育を決めるのは大学でありまして，文部省がああしろこうしろとは言えませんですよね．

入試の問題またしかりであって，文部省はお願いはすることはできるけれども，大学の入試を結局のところ変えていくのは，大学だ．

文部省も反省しなければいけないのは，そうは言いながら，文部省は戦後50年いろいろ調べてみると，大学に確かに命令はできないからやってないけど，これはやっちゃいけないということは結構言ってるんですね．18歳より若い者は入れちゃいけない．学部は4年在学させなければいけないとか，いかに優秀でも大学院に入るためには4年修了していなければいけないとか，こうしちゃいけない，ああしちゃいけないというのはいろいろやってます．あるいは大学設置基準みたいなものも，これは必ずやっておかなきゃいけないみたいなことはある程度言っています．

それをどんどんいま文部省は，なくしていこうとしているわけですね．さらに一層各大学の判断に委ねていこうというようなところがございます．

文部省が本来，コントロールをすべきでないところまでコントロールをしてきた，お願いをしてきた部分があることは事実です．ただ，はっきりもうそれを変えようとしているのは，最初に申し上げましたように，誰でもが大学に行ける時代になったと．特定の人だけが行ける時代ではなくなった．例えば入試の問題しかりであって，今まで確かに文部省は，センター試験を使ってもらわなきゃ困ります，ああしなきゃ困ります，科目はできるだたくさんやらせないでください，あまり難しい問題は出さないでくださいというお願いをしてきました．これは確かにしてきたことは認めますし，事実です．だけど，これまた昨年12月の中教審答申で，その方針は変更すると，もうこれからは各大学が自らの責任においてどのような入試を課してもかまわないというところにきている．

それ，随分態度が違うじゃないかと言われるかもしれませんが，子供の数が多くて大学が少ないときには，いわば経済でいえば統制経済を引かざるを得ない部分がございます．少ない肉を大勢の人間で争う時に，市場の原理に委ねるというわけにはいかないところがございますから，文部省のほうで過当競争にならないように，受験競争が過熱化しないように，こうやってほしいというお願いをしておりましたけれども，もう肉の数と，それを求める人の数が同じになり，どうかすれば肉のほうがたくさんあるよと言われてるぐらいの状態になってくると，これはもう市場の原理に委ねる時代に入ってきた．市場というと言葉が悪いですけど，さっきの受験生が選ぶ，選ばれる．例えばある大学がこういう入試を課す，ものすごい難しい入試を課すのはいいんだけれども，どうもその大学の授業内容を見てみると，あまりろくな教育も

していない．なんでそんな難しい入試を出すところに誰が好き好んでいくもんかいと思って，学生のほうが受けないでしょう．だけど本当にいい教育をしてくれるということがわかってる大学だったら，どんなにハードな問題を課されても，いいではないかということです．

実は今回，あまり宣伝してくれるなと，初等中等教育局からも，高等教育局からも言われているんですけれども，私は中教審答申の読み方として，きちんと説明しなきゃいけない．確かにあの答申の中でも，学習指導要領の範囲は守ってほしいという意味のことが書いてあるんですが，これは学習指導要領の狙いに「沿って」やってもらいたいといっているのであって，難度を規制しているわけではないという考え方でございます．つまり，どんな難しい問題を出してくださっても結構だけども，学習指導要領の狙いといのうは，片々たる知識を問うということは狙いでないのだから，難しいことでも，それは本当に学ぶという，自ら学び，自ら考えるという学習指導要領の趣旨に沿った問題であるならばいいけれども，クイズ番組のクイズみたいに難しい問題を出すのは，学習指導要領の自ら学び，自ら考えるという趣旨に沿っていない．

私はちょっと医学のほうではわかりませんけれども，そのときに例として出したのは，例えば東京大学法学部に入りたいんだったら，丸山真男の著作を一冊読んで，それのレポートを書きなさいという問題を，東京大学法学部の入学試験に課したってかまわないじゃないか．それは自ら学び，自ら考えて，そして自分がその法学を志すということをアピールするための試験であるというような考え方に立てば，それでももちろんかまわないと．今まで文部省が課してきた制約というのを全部なくしていこうじゃないかということのなかで，各大学がいろいろお考えいただく時期にさしかかっている．

確かに従来文部省は，大学が科目指定をするのはやめてくださいと，高校での履修科目指定するのはやめてくださいとお願いしていましたけども，それももう撤回いたします．履修科目の指定もやっていい．ただしそのためには高校が選択できる幅をつくっていかないと，いくら科目を指定されたって，それをうちの学校では履修できないことになっているというふうなことになったのでは困るわけであります．だから例え新潟大学医学部では生物も課すだけではなしに，高等学校では福祉の授業もしてもらいたいという考え方だって出せるわけですね．福祉の授業をとってもらいたい．ところが福祉の授業を開設している学校が少ない．それをどんどん開設してほしいと私たちはお願いしていますが，できてないときにどうすればいいかというと，他の高校で履修することも可能である．通信教育で履修することも可能である．場合によっては大学で履修することも可能である，高校生が大学の授業を受けたことをもって単位認定をするというのも可能であるというようなことをしていく．

さっき申し上げたように，これからは一人ひとりに合わせてどんどんスピードが変わってくるとするならば，高校の授業ではどうやったって飽き足らない子供というのも出てくるでしょう．数学の授業に関しては高校の授業では飽き足らないけれども，じゃあそのまま大学に入ってしまうと，ほかの授業は，英語の力はまだ高校程度の力しかないという場合も当然あるわけですから，そのときには数学の授業は大学に行って受けてきなさいと，英語の授業はみんなと同じようにこの高校で受けましょうというようなことも可能になるようにしていくわけであります．

いまの高校生にこれを要求したらとても無理なので，小学校の段階から，自ら選択して学んだことは，自らの責任においてやり遂げなければならないという意識を育てていくわけです．親が言うから，先生が言うから勉強するのではなくて，自分がこのトラックのスピードを測ってみたいと思ったから，難しい計算だけど最後までやり遂げなければならないんだよな，そうしない限りこれはわからないんだよなというような経験を小学校の段階から積み重ねていくことによって，その子が高等学校に行くときには，自分は高校で何を学ぶのか，単位を全部自分で選んでいって，選んだからにはそれをきちんと最後まで履修していかなければいけないという意識を持つ．そういう高校教育を経て大学に入ってくる学生たちが，いまさまざまな場で言われているような，こんな大学生がいて困ったもんだというようなことにならないものを送り出していくということが，実は初等・中等教育では強く求められているわけでございます．

文部省は全体として，ものをはっきり整理すべきときにきているんですよ．あたかも大学も文部省が左右できるような言い方をちょっと言ってしまったりするようなことはおかしい．高等教育は本当に高等教育機関の，基本的にですよ，原則，とにかく高等教育機関の自主決定で行われれていくものだ．例外的に文部省が何かをお願いすることはあるでしょう．

こんどは初等・中等教育のほうは，文部省とか，教育委員会とかいった行政の側がこうやるんだよというのを決めていって，しかしそこにも例外的に各学校が自主決

定できたり，各先生が自主決定ができたりという部分をつくっていくという，その原則，例外を，きちんと整理をしていこうではないか．

あとは行政機関であるところの高等教育といっても，私立と国立ではまた意味が違ってくるわけでございましょうが，いま申し上げた学校種別では，小・中・高等学校は原則，外からの規制，文部省とか……，例外として，でも各学校が決められるとこをつくっていこう．高等教育はその逆だと申しました．

こんどは国・公立と私立という考え方に立つならば，国・公立は原則として情報公開，説明責任，それから外部からの評価を受けるということが，これは原則．例外的に情報は全部開示できない部分もあるだろうし，説明できない部分もあるでしょうけども，原則はそうなんだということを明確にしていく．

私立は，原則として情報公開しなくていいと言ってるわけではないですが，国公立にはそれが課される．そうすると各教育機関が，自分のところは国・公立なのかというメルクマールと，自分のところはどの教育段階なのかというメルクマールをしていけば，何が原則でその学校が運営されていくのかということを考えていかなければいけないだろうというわけであります．ただし，高等教育機関においては国立という形態はなくなっていく方向で進められていっているので，その独立行政法人になったときに，それは国立と同じようにしばりがかかっていくことにはならないから，いまの国立よりはそこは当然自由度が増さなければならないだろうということは，そこの修正はこれから独立行政法人化していくなかで加えられていかなければいけないけれども，原則はそういうことだろうと思うわけであります．

ですから文部省としても，今まではなんだかんだ言いながら，これは私自身の反省も込めて言うならば，横並び主義というのがございます．文部省自身がやっぱりお役所ですから，どうしても横並びだったり縦割りだったりするようなところがございます．ただしかし，その文部省ももうあと半年後には，文部科学省という役所になり，組織も変わり，さまざまなことが変わってきて，従来のような文部行政のやり方では駄目だよ，従来のような文部省の役人のものの考え方では駄目だよというところに直面をしていかなければならないとこへきている．

そうすれば当然，大学についても横並びをやるのではなしに，例えばいま国立大学の43の医学部，全部医学部という名称だけれども，それで必ずしも医学部である必要はないのかもしれない．例えば文系では総合政策科学部とかいろんなものがどんどん出てきている．じゃあ医学部だって例えば総合医療学部みたいな考え方があってもいいだろうし，承るところこの新潟大学では，医と歯の合同大学院みたいな考え方，さまざまなやり方が，文部省がそれは前例がありませんからねとか，よそがやってませんからね，みたいなことで難色を示したりするようなことが確かに過去にはあったわけでございますから，そこのところをはっきりと文部省の側も自己認識して，各大学がやろうと思うことを，できるだけ応援していく方向で考えていかなければいけないので，それは前例がないから，自分が上司に説明するのは大変だからみたいなことは思っちゃいないでしょうけれども，なんとなくやっぱりこれは前例があるというと，まことに説明がしやすいのですね．お役所ってそういうところでありまして，過去は，なんかくると，ひどい人になると，なんか持ってきて決裁を仰ぐと，前例はって聞いて，前例がございますというと，「はい」といって押してくれるというようなことが，極端な例でいうとあるわけです．いまはわが役所の中でも，そういうことでやっている人は信用を失っていく．前例がある，ないにかかわらず，前例があったって，それがいいか悪いかの判断はそこでしていかなければいけないわけでありまして，前例主義，縦割り主義，横並び主義というのが三大官僚制の欠点でございます．

ちなみに私は，東京大学法学部で何をお前勉強してたのかと言われれば，官僚制の弊害の勉強をしておりまして，行政学の辻　清明先生の薫陶を受けて，官僚制というのは放っておけば，そういう弊害を必ず生んでいくから，それを正さなきゃいけないというようなことでございました．

ただ官僚制というのは，官僚はあくまで制ですから，官僚組織でなくても，例えば大学であっても，組織というものは官僚制化していく実態を持つというのが，私が受けた教えであります．例えば民間企業であっても，そのままずっとやっていけば，やっぱり官僚的になっていく．したがって大学といえどもやはり組織である以上，官僚的になっていく傾向がある．それは国立大学と私立大学だったら，やっぱり国立大学のほうが官僚的になってく傾向は強い．これはちょっと傾向の問題でございますので．それをどういうふうに打破していくのかを不断に自己判断していかなければいけないという教えを受けていたのであります．ようやくいま，それをやるのが当たり前だという時代になってきて，文部省もそういうことで何がいいのか，悪いのかを一つひとつ判断していく．

これもはっきりしなきゃいけないのですが，じゃあ文部省は，各大学が言ったことをなんでもOKと言えるかというと，それはそうはいかない．だけどなんでもOKと言えないのは，前例がないからとか，自分が納得がいかないからということで文部省がNOと言っちゃ駄目なんで，文部省が唯一発するならば，それにお金がかかる，そのお金が国民の皆さんに納得していただけるような説明ができるかどうかということについては，考えていかなければいけない．基準はそういうことでございます．

つまり今までは各大学が新しい計画を立てたり，新しいことを考えるときに，文部省に行ったときに，文部省の役人が理解してくれるだろうかということになってしまっていた．そうではない．文部省の役人も，大学の方も一緒に考えなければいけないのは，国民の皆さんに納得していただけるような提案であるかどうか．なるほどそれに俺たちの税金を使っていんだ，というふうに言っていただけるような内容であるかどうかということを問うていくのではないか．

一昨日も私は文部省の新任職員研修でそういうふうに言ったんです．国民の皆さんに対してプレゼンテーションしていく．例えば新潟大学をこのように変えます，このように変えるには当然お金がかかります，そのお金を皆さん方の税金を使ってやらせていただきますが，納得してくれるでしょうかということを考えていく．だから文部省と大学の関係というのは，これからは文部省対大学という考え方じゃなしに，文部省と大学が一緒になって，国民の皆さんが納得してもらえるようなやり方を提案していく，知恵を出し合ってやっていかなければいけない．だから文部省がもし大学の出してきた案になんらかの問題点を指摘するとするならば，前例がないからとか，ほかでやってないからとかではなくて，ひょっとするとこの部分はなかなか国民の皆さんに納得してもらえないかもしれない．

国民の代表というのは大蔵省主計局でございます．代表というか，国民の意見を代弁する立場．まず大蔵省主計局に納得してもらうというのは，大蔵省主計局の人が勝手に判断するというわけじゃないですけど，大蔵省主計局の皆さんというのは，従来の大蔵官僚はちょっと違うかもしれませんけれども，いまの時代の大蔵省主計局というのは，国民の財布を預かっているという立場で，それが本当に出すに値するかどうかを考えていくというのが，昔はいざ知らず，いまの主計官，主査たちの考え方は，そういうことになっております．

だから，そういう意味でこれから私たちが大学を考えていく，独立行政法人になるので，それでもやっぱり同じように国費を投入していくべきだし，いかなきゃならない．なおさらのこと国民の皆さんに納得していただけるようなことができないだろうかということを考えていくのではないかと思います．

ある人に素晴らしいことを言われて，私それをすごく感激したのであります．私は一番感激したのは，大蔵省の主計局の人たち，それに限らず大蔵省の人たちが，自分たちは国民の皆さんの財布をお預かりしているんだから，当然厳しい査定とか，一生懸命考えて，国民の皆さんのお金の使い方が，みんなが一生懸命納めてくださった税金を無駄に使わないようにするのが，自分たちの仕事なんだと思ってやっているんですよと言われたのも感銘を受けました．なるほどと思って，私もいろいろやってたら，結局自分のやってる仕事は，医学教育課長のときのことでございます，医学教育課長を終わるころにこういうことがあったんですけれども，当時から独立行政法人なんていう話も出てきているし，そうなるにしろならないにしろ，国民の皆さんに理解してもらえる大学病院，国民の皆さんに理解してもらえる大学の医療計画部というものになっていかなければいけないなというお話をよくしていたのであります．

そのときにこう言われたのですね．忘れられないです．鳥取大学の看護部長さんにこう言われたのです．ああ，医学教育課長さん，ってちょっと公の場で言われた．「私は，今まで文部省の医学教育課というのは，私たち大学病院で働く者の味方だと思っていたんですけれども，違ったんですね．半分は私たちの味方で，半分は国民の皆さんの味方というか，そちらの立場に立って考えるのが，あなたの仕事なんですね」って言われて，なるほど，私のやるべきことを言葉としてきちんと言ってくださった．

それは大蔵省と違って，私たちも国民の側だけに立ってその利益を代弁していくというわけではないけれども，その間に立って，大学はこうありたい，病院はこうありたいと思ってることと，国民の皆さんは何を望んでいるのか，どうしているのかということを，間に立って両方に説明していく，大学のやってることを国民の皆さんに説明する，国民の皆さんの願っていることを大学のほうに，みんなこう思ってるんですよということをやっていくのが，これからの文部省の役人の仕事なのだなということを痛感いたしました．

きょうは大学の皆様方にそういうお話をする機会を得

てますけれども，いまの私の立場なんていうのは，あらゆる国民の方々に，いろんな場でご説明をしなければいけないところがある．だからそれは当然大学だけが変わらなければいけないのではなくて，小学校も，中学校も，高校も，また家庭や地域の大人たちのものの考え方も変わっていかなければならないわけであります．

大学と高校が，特に今回のいわゆる大学と初等・中等教育と，高等教育の接続に関していうならば，大学の意識と，高校の意識がそれぞれ変わって，そして本当にいわゆるインターフェースの部分で生徒が，自分が何に行きたいのか．つまり偏差値が高いから医学部に行きたいというのは，やっぱりおかしな選択であったんだけれども，それが当たり前であるかのようなやり方をしてきたことの問題点．例えば一回も病院に足を踏み入れたことがないのに，そんな人はあまりいないかもしれないけど，医療をしている側の立場に一回も触れたことがないのに，医者になろうというようなことでいいのかどうかというようなことを高校側も考えていかなければならないし，また大学側も，お聞きすればこの新潟大学でも，すべての入学生に対する面接の実施ということをご検討いただいていると聞いておりますけれども，そういう大学側の努力，高校側，大学側，両方が今まで以上の努力を，その接続の部分に払ってもらうことが必要だと思うのです．

大学の側は，むしろ医学部の場合は，ほかの学部だったら私は大学教育をちゃんとしてくださいということをお願いしなきゃならないのでありますけれども，医学部はほかの学部と違って，大学教育をきちんと行っているとこだというのは承知しているので，ここではそれは申しませんけれども，大学教育をよくすることよりも，むしろ次の段階として，入試をどうするかということに考えてもらわなければいけない．実は別の立場のところに行きますと，大学入試が変わらない限り，全然日本の教育はよくならないよという言われ方をする．そこで私がご説明するのは，大学入試は着々と変わろうとしている．特に医学部を見てください．医学部から変わり始めていく．そうしたらほかの学部だって当然これは変わらなければいけない方向に行くんだということを申し上げております．

じゃあ医学部はどう変わっているのかと言われたら，一言でいうならば，医学部の先生方ほど入試に手間暇をかけようと思っているのはいない．ほかの学部では面接も何もしないわけですから，試験のときの試験監督に立ってるだけでしょう．東京大学法学部の先生なんていうのは，試験のときの試験監督に立ってるだけで入試にかかわっている．やっぱり面接をすれば，その面接をすることによって，大学側も選ぶ自覚も出てくるし，大学側が選ぶ自覚を一人ひとりの先生として持ってもらいたい．自分が選んだ学生を，自分が教えているのだというふうに教える側が思っていただく．こんどは学生の側も，自分は選ばれたい，選ばれたいと思ってきているのではなくて，自分が選んだこの学部，そしてこの大学ということを考えられるように，実は高等学校では今まで受験指導にべらぼうな労力をかけてたその労力を，進路指導のほうに向けてもらいたいというわけであります．私たちは決して入試を易しくすれば，子供達が幸せになる，なんてちっとも思っていないのであります．

最後に申し上げさせていただくならば，ある高校の先生から言われました．「文部省はゆとりの教育とかなんとかいって文部省がやってることはいいことだが，それはあとの話を聞いて，誤解されていると言うことがよくわかりましたけれども，大学入試を緩和して，私の教え子に医者になりたいというのがいた．医者になりたいというのだけども，学力がどうしてもあまり高くないので，医学部の入試を何回も受けても，何回受けても，落ちるんだ．だけど医者になりたいという熱意は人一倍どころか人の何倍もあるから，何回も何回も受けている．この熱意を生かしてどうして医学部に入れてくれないのか。」というから，それは私たちの考えてることと違う．それは無理です．熱意さえあればなんにでもなれると言っているのではないです．力量プラス熱意がほしいというので，力量だけでなれる，つまり学力だけでなれるのがおかしいと言っているのであって，学力プラス熱意というふうにしていこうと思っているのであって，それを誤解されて，熱意さえあれば何にでもなれるなんていうのは大間違いだし，そもそもあなたの高校教師としての進路指導は根本的に間違っている．その子供は何がやりたいのですか，その子供とよく話し合ってないじゃないか，その子供は医療の仕事に就いて人の命を助けたり，何かをしていこうということをやりたいんでしょう．あなたという教師が私はよくないと思うのは，だから医学部を受けろという進路指導をしていることに問題があるんであって，医療に携わる仕事が何種類あるかご存じですか．看護する人もいる，臨床検査をする人もいる，さまざまな仕事があって，それらはすべて人の命を守り健やかに保っていくための仕事をしているのに，あなたという教師が医者という仕事しか知らないものだから，かわいそうにその子は，医者になる，医者になるって何度も何度もなれないということになるけれども，その子の話をよ

く聞いて，いろんな医療の仕事があるよ，これも医者と同じように素晴らしい人の命にかかわっていく仕事なんだよということを，きちんと高等学校で教えていれば，自分の能力に見合う，自分の意欲とも合う仕事というのを見つけていくことができるのに，非常にそんな不親切な，人の命を助けたいならイコール医者だ．

その先生も看護の仕事は知ってたらしいんですけども，どうして看護って例えば言わないんですかって言ったら，あれは女性のやる仕事でしょうっていうふうなことをいう．その程度の進路指導の意識でやってる高校というのも，これは大きく変わっていかなければいけないわけでありまして，私は，大学が変わらなければ世の中変わらないというような考え方はおかしいと思うのであって，それぞれのところが，最初に申し上げました一生涯が長くなって，生涯学習していく時代，何度でもやり直しがきく時代になってきている．例えば高校の先生がいう，とりあえず大学に入れという考え方は，やり直しがきかない時代の考え方，取りあえず大学に入っておけ，取りあえず普通科高校に入っておけみたいな進路指導も，これはやり直しがきかない時代の考え方．

福沢諭吉じゃないですけど，一身で二世を生きるという，２つどころか，３つも４つも生きていけるぐらいの長い時代を私たちが迎えているにもかかわらず，単線型で一つの方向へ早く決めさせちゃって出していこうというようなやり方を，教育界だけでなしに，周りの親や，大人全体も含めて変えていかなければいけないところにきているわけでございます．

きょうは私のほうからは，大きな教育をとりまくバックグラウンドの状況ということをお話し申し上げて，そういうことを踏まえ，また，もちろん先ほど来議論されてきた医学の在りよう，医療の在りようというものを含めて，どのような，つまりオンリーワンとしての大学，今までは43，つまり無医大県解消計画なんていう考え方自体が，同じものをどんどんつくっていこうみたいなことで今まではやってたんでしょうけれども，これからはオンリーワン，ここにしかないものというものをつくっていく大学へと明らかに変わっていく時期へ差し掛かり，新潟大学がこれからどのような構想を打ち立てていただくのかというのを，私も楽しみに見守らせていただきたいと思いまして，話を終わらせていただく次第でございます．

ご無礼なことも多々申し上げましたけれども，ご清聴ありがとうございました．

司会（岩渕）　寺脇先生，貴重なお時間をいただきまして，文部省がいまお考えになってることをお話しいただき，特にゆとりの教育というのは非常にわかりにくかったのですが，今日お話をお聞きしまして，先生がどういうことをお考えになっているか非常によくわかりました．ありがとうございました．

国民の声というお話で，君らは国民の声を聞いてやったらいいといったときに，私はすぐ，国会議員を思い浮かべてしまうんですけれども，先生のお話だと，大蔵省の主計局が国民の声であると言われ，私の発想は今までそのようなものはなくて，（寺脇：「すみません．それは問題発言でありまして」）やはりそういう考え方も僕らとしても持たないといけないんじゃないかと思っております．

本当に貴重なお話をいただきましてありがとうございました．先生に拍手をお願いいたしたいと思います．

それでは司会としてはここで締めまして，総合司会の山本先生に最後にまとめていただきたいと思います．山本先生，どうぞ．

総合司会（山本）　今日はいろんな面から私どもにご指導いただいたと思っております．私も感ずるのですが，国民のニーズに応えるのが医学教育や医学研究について必須であると．いろんな既存の価値観を打破していく必要があるのですが，変わらないものはやはり国民のニーズに応えた医学教育，医学研究であるということを強く感じました．

それから寺脇先生のお話の中で，私，新潟大学の生き方と共通するものがあるなと思ったのは，いま新潟大学の理念・目標をつくっておりますが，その中のひとつが，「ナンバーワンよりもオンリーワン」，「一番よりも唯一」という標語がキーワードとして入ると思います．新潟という地域特性の中で，旧帝大のようなナンバーワンを追い求めるのではなく，地域における特徴を求めていきたい，ナンバーワンよりオンリーワンというような言葉と共通することがわかり，意を強くしました．

これをどう私どもが今後新潟大学医学部のなかにどう括かしていくかという重い課題を背負わされたと思います．私どもの次の世代のためにぜひ頑張りたいと思っております．これで総合司会の役目を終わらせていただきます．

講師の先生方ならびにご出席の皆様，大変ありがとうございました．

進行（高橋）　それでは最後に，閉会の辞を県の医師会のほうから日戸先生，お願いします．

日戸　この大学のB29の卒業生でございますが，きょ

うは大変良い企画であったせいか，多数の先生方がご出席いただきました．題名も素晴らしいし，また3人の方々のそれぞれ個性のある話を聞かせていただきました．

県の医師会はこの会が，できてからずっと，医学部と，あるいはときに学士会と一緒にやってきたのでございます．これまできたのは両方とも地域を大事にしたということが根本にあろうかと思います．さっきオンリーワンという言葉が出ました．この大学学士会，あるいは医学部の会ができたオンリーワンは，皆様ご存じのようにツツガ虫でございました．これからツツガ虫が重大事になることは，ないと思いますが，また新しい問題が21世紀には出てくるようでございます．皆さんと力を合わせて，それを地域のために解決していきたいと思います．

今日は先生方にお礼を申し上げまして，閉会の挨拶にさせていただきます．どうもご苦労さまでございました．

